

日本という国に生まれ、日本で育ち、平和に囲まれて生きてきた。不自由な思いなどしたことがなかった。朝起きて、朝食を食べ、歯みがきをして、学校へ通う。すべてが当り前の日常であった。もちろん幼いころから、世界には貧しい子供たちがいて、満足にご飯も食べられないということは知っていた。私と同じ生活を送ることができない子供たちもたくさんいると知っていた。しかし、「だからなんだ」という感じだった。見たこともなければ彼らの詳しい現状も知らない。私の日常は変わることはなかった。ただ単に、自分のためだけに生きていた、高校1年生の時までは。

高校1年生の時、児童労働について初めて学んだ。漠然でしかなかった彼らのイメージが、私の頭の中でリアルなものに変わった。VTRの中で見た、まだ幼い彼らはカカオ農園で働いていた。高い危険な木を体一つで登って、鋭い刃物でカカオの実を切り落とす。幼い子どもたちにとっては、とても危険すぎる作業であった。世界には、子どもでもあるにも関わらず、学校に行かず、低賃金で働き続けている子どもたちがいる。私たちが普段おいしく食べているチョコレートは今、その子ども達の労働のおかげだったのだ。そう気づかされた途端、呑気に暮らしていた自分が情けなく、謝りたくなった。「カカオの実が何に使われるか知っている？」インタビュアーが彼らに尋ねた。「知らないよ」と彼らは答えた。とても衝撃的な言葉であった。私よりも幼いのに関わらず、険しすぎる道を歩いていると気づいた。その時から、彼らのことをもっと知りたい、児童労働についてもっと学びたいと思った。そして同時に、何かできることはないだろうかと思った。しかし、直接自分の手で彼らを助けることはできない、一体何ができるだろうと思っていた矢先、「フェアトレード」に出会った。

フェアトレードとは、つまりは公平な貿易のことだ。開発途上国の原料や製品を適正な価格で購入することで、開発途上国の生産者や労働者の生活改善と自立を目指している。そして私は、気軽に誰でもできる国際協力だと思っている。高校生の私にとって、それは大きな出会いだった。国際協力に興味を抱きだして、でも行動を起こすのは難しいと思っていた私はすぐに飛びついた。こんな素敵な形の国際協力、私だけ知っておくのは勿体無いと思った。文化祭が近かったこともあり、フェアトレード商品を販売することにした。いろんな人がフェアトレードについて知ってくれた。とてもうれしかった。その気持ちは大学生になった今でも消えていない。昨年、一年間参加したフェアトレード活動では多くの方にフェアトレードの魅力について伝えた。私しかできないことができた、と実感した。

今夏にフィリピンに4週間ほど滞在した。外を歩いているとストリートチルドレンたちがお金を要求してきた。多くの幼い子どもたちがお腹をすかせていて、道端で寝ている子ども達もいた。毎日、外に出ればその姿を見ることができた。日本では出会うことのない光景に息が詰まった。まだまだ、変えていかねばならないことはたくさんあると実感した。

共に生きる社会を作ることとはとても難しい。でも不可能ではないと思う。方法はたくさん隠れているからだ。実際、私はフェアトレードに出会うことができた。世界には様々な「共に生きる」方法があると思う。そして、どれが間違いだとか正解だとかは分からない。

「フェアトレードとの出会い」

松山大学人文学部英語英米文学学科3年 西上結菜

ぜひ、買い物に行った際にはフェアトレード商品を手にとってみてほしい。たったひとつのフェアトレード商品で、会ったこともない誰かが笑顔になるだろうから。直接、彼らの笑顔を見ることはできなくとも何かは変わっているだろうから。私はこれからもフェアトレードの魅力について伝えたい。それが私にできることだと思うから。皆が皆、自分の方法を発見できて、誰かの為に行動を起こせたなら、それは「共に生きる社会」の始まりだと思う。